

テーマは「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを」

伊達市民憲章作文コンクール

市内の小学5、6年生と中学生を対象に、市民憲章作文コンクールを実施しました。小学生の部 220点、中学生の部 233点の応募があり、11月の審査会で22点の受賞作品が決定しました。各部の最優秀賞に輝いた作品をご紹介します。 〇 総務課行政管理係 ☎ 575-1111

受賞者の皆さん（敬称略）

▼最優秀賞

八巻拓成（栗野小6年）
佐竹芽依（梁川中2年）

▼優秀賞

八巻明莉（大田小5年）
宮崎優誠（大石小6年）
小野紅瑠実（桃陵中3年）
須田玲菜（霊山中2年）

▼優良賞

滝澤董（保原小5年）
門馬克弥（伊達小6年）
三浦天寧（掛田小6年）
高松恋波（小国小6年）
鈴木もえ（伊達中2年）
鈴木遙天（月館中1年）
田巻彩（梁川中3年）
高橋凱翔（伊達中3年）

▼佳作

羽賀美月（小手小6年）
佐藤琳（石田小6年）
吉田蓮（伊達小5年）
半澤璃子（月館小6年）
平林冬羽（月館中3年）
菅野優空（霊山中3年）
清野琴未（松陽中3年）
齋藤紅友空（月館中2年）

中学生の部 最優秀賞



支えあいと思いやりの職場体験

梁川中2年 佐竹 芽依さん

私の両親は「地域の人の力を支える」という言葉を絵に描いたような仕事をしています。父は会社員のかたわら、伊達市の消防団員を長く務めています。平常時は会社の通常業務をこなしながら、災害から地域住民を守るための広報活動や地域の防災指導を行います。災害時には自宅や職場から現場へ駆けつけ、地域での経験を活かした消火活動や地域住民の救助活動を行っています。母は、伊達市内の病院で看護師を長く勤めています。入院患者さんの食事や入浴の補助をして、患者さんやそのご家族の方の助けとなる業務を行っています。他にも患者さん本人とのコミュニケーションや、そのご家族への説明や聞き取り、ミーティングや研修会への参加、後輩への指導、時には深夜勤務でのナースコールへの対応と、地域住民の方々の回復を手伝ったりケアをしたりという、多岐にわ

たる仕事をしています。私が将来、地域のためにやる仕事に就きたいと思うようになったのは、そんな両親を見て育ったからかもしれません。私は、中学校の職場体験で、体験先を伊達市の北福島医療センターに決めました。その理由は、亡くなった祖母が生前の入院治療で北福島医療センターに大変お世話になったこと、そして、そんな祖母の入院治療を目の当たりにして、私が将来、地域医療の職種を強く希望するようになったからです。職場体験を通じて私が特に感じたことは、とにかく何においても、看護師さんたちが患者さんを最優先に仕事をしているということでした。「ベットのシーツがほんの少しずれているだけでも、患者さんが転倒して怪我をしましちゃうかもしれない」というお話を聞きながら看護師の方々が、どんなふうに対応すれば患者さんのためになる

のかを一番に考えて仕事をされている、ということを感じました。患者さんと同じ目線になってそれぞれの方と触れ合いながら仕事をされている、看護師という仕事を身近に感じられる職場体験でした。自分の地元病院での医療現場の生の声は、本当に貴重な体験となりました。地域医療には、地域の方々との触れ合い、チームワークそしてコミュニケーションが大事なのだということを痛感しました。「そだてましょう、支えあいと思いやりの気持ちを」という伊達市民憲章は、さまざまな年代の方が居住し、特に高齢化が進み要介護認定者数や要介護認定率が上昇傾向にある伊達市には、非常に重要な意味のある憲章だと感じます。私は、将来の夢を叶えて地域医療の仕事に就くことで、支えあいと思いやりの気持ちで地域のために少しでも役に立てれば良いと考えています。

小学生の部 最優秀賞



広げよう、思いやりの心

栗野小6年 八巻 拓成さん

ぼくは、去年、保原町にある介護施設を訪ね、スタッフの方や施設で過ごす方と交流する機会がありました。この施設は、軽度の認知症や、身体の介護が必要な人に、介護や看護、リハビリテーション、栄養管理のサービスを提供しています。ぼくが訪ねた時には、車いすに乗ったり、つえを使ったりしているお年寄りが三十人位いました。介護を必要としているお年寄りはもつとたくさんいるという話を聞いて、ぼくはとてもおどろきました。スタッフの人達はいつもお年寄りのすぐ側にいて、ぼく達がお年寄りに伝えたいことを分かり易い言葉にして伝えてくれたり、ぼく達が考えたゲームでお年寄りのみなさんが楽しめるように、一緒に盛り上げてくれたりしました。他にも、食事や入浴の介助の仕事など、お年寄りの手助けをする様々な仕事をしていることを知りました。ぼくは、スタッフの人達が、お年

寄りの目線に合わせて話したり、仲良く楽しそうに接したりしている姿を見て、スタッフの人達がお年寄りを支えているんだなと感じました。それでも、施設で働いている人達には、いろいろ大変なことがあるのだろうと思いい、質問してみました。返ってきたのは意外な言葉でした。「大変なこともあるけれど、お年寄りのうれしそうな笑顔を見たり、『ありがとう』と言われたりすると、大変なことなんてふっとんじやうんだよ。」「わたしたちが、お年寄りから元気をもらっているんだよ。」ぼくは、支えられていると思っていたお年寄りも、スタッフの人達を支えていることに気が付きました。介護施設を訪ねて、この施設では、介護を受けている人達、そして介護する人達がお互いのことを思いやって生活していることが分かりました。介護をする側の人達は、どうい

助けをすればお年寄りが不自由なく過ごせるのかを考えて行動していたし、介護を受ける側の人達は感謝の気持ちをもちて生活していました。ぼくがお年寄りに「何か困っていることはありますか。」とたずねた時、あるおじいさんが「ここにいる人達が優しく親切にしてくれるから、何も困っていないよ。でも、自分の足で歩くことができなかったら、もつといいな。」と話してくれました。足の不自由なおじいさんは、思うように歩くことができないことを悲しみながらも、自分を支えてくれている周りの人達の存在をありがたいと感じていることが伝わってきました。この経験を通して、ぼくは、相手のことを思いやる気持ちから、支え合いが生まれるのではないかと思いました。支え合いが生まれると、みんなが明るく楽しい気持ちになります。笑顔あふれる伊達市になるように、思いやりの心を広げていきたいです。